

なかに作られた町のようだ。

下を見ると、道路に木がずらりと並んでいる。ドームのなかの街路樹。人工灯で育てているにしても、ひどく不自然な感じがするのはなぜだろう。

前の建物やこの部屋のなかと同じ色の幹と枝。それを少し薄くした色の、木の葉。

ぼくのなかで、なかにスイッチがはいった。

濃淡だけ？ 木が、建物や部屋と同じ色のはずがない。木の葉は……そう、緑色じゃなかったか？ そしてその緑色は、今見えている色とはちがう。なぜか、そう確信できる。

もういちど見る。建物も、道路も、街路樹の幹も葉も、部屋の壁も床も天井も、ベッドもシーツもテーブルも、濃淡があるだけで、同じ色だ。ぼくは自分の手を見る。これも同じ色だ。

ふと、考える。夢のなかではモノトーンだと、どこかで読んだ気がする。ああ、なるほど。ぼくは今、夢を見ているんだ。そう思うと、急に気が楽になった。

窓を開けてみる。クラクションや、サイレンの音を聞いたり、誰かの作る朝食の匂いをかけば、ふと目が覚めるだろう。なぜなら、それは現実の音や匂いだからだ。

窓を開ける。だがそこには匂いもなければ音もない。

無音。無臭。

一瞬、ぼくはあせった。だが、よく考えれば、これは夢にちがいないのだから、音も匂いもしないのだ。きつとまだぐっすり寝ているから、現実の外の匂いや音をキャッチできず、目を覚ますことができないのだろう。ならば、この夢の世界を楽しもうじゃないか。

自分の格好を見る。タテ縞のパジャマだ。いくら夢のなかでも、これで町を歩くのは気が引ける。

つくりつけのタンスを開けてみると、服がたくさんかけてある。部屋の中は殺風景だが、どうやら夢のなかのぼくは、それほど貧乏ではないらしい。だが、どれにするか見ている、ぞっとした。薄い色の同じ形のワイシャツと、濃い色の同じ形のズボンがずらりと並んでいるのだ。

まあ、落ち着け。たかが夢だ。どうってことはない。

ワイシャツを着て、ズボンをはき、きちんと折りたたまれている靴下をはいて、ぼくにぴったりサイズの靴をはく。どうも、普段こんな格好をしていないような気がする。サイズは驚くほどぴったりだが、なんとなく、着心地が悪い。いつものぼくは、多分もっと動きやすい格好をしているはずだ。五分もしたら、脱ぎたくなるだろう。

選ぶ必要がないというのは楽だが、ひどく退屈だ。そのうちに選ぶということ自体を、忘れてしまいうんじゃないだろうか。

タンスのとなりの扉を開けると、そこは浴室だった。洗